

## ホーソン「白髪の戦士」

——“Gray Champion” とは何者か——

鈴 木 進

作家が新聞や雑誌等に発表してきた短編小説をまとめ、一冊の作品集として出版することになった時、どの作品を収録し、どれを省くか。また選んだ作品は何を基準にどのような順序に並べ作品集として編むものであろうか。本を出すにあたって出版者の制約は当然受けよう。だが作品の選択や配列について作者に委ねられるとしたなら、そこには作品に対する作者の好み、思想、時には時代の要請などが反映されるのではないだろうか。

1825年、ボードイン大学を卒業するとすぐセーラムに戻り、10年以上も孤独な作家修業を続けたナサニエル・ホーソンが、作品を書いては *Salem Gazette* や *The Token* 等の雑誌に匠名で発表してきた。それらが約36篇にのぼった1837年に Horatio Bridge の隠れた援助により最初の短編小説集 *Twice-Told Tales* を世に問うことができた。“The Gray Champion” はその巻頭を飾る、重要な位置におかれた作品である。ではホーソンはなぜ“The Gray Champion” を一番最初にもってきたのであろうか。そのことからどのようなことが考えられようか。

*Twice-Told Tales* 第一版に収められた作品の数は18篇、その目次によると“The Gray Champion” で始まり、次に“Sunday at Home”, “The Wedding-Knell” と続き、最後が“Dr. Heidegger’s Experiment” で終わっている。もし作品の出来栄えというのであれば、後の批評家たちだけでなく、おそらくホーソン自身も“The Gentle Boy” や“Wakefield” などのほうが優れていると考えたことであろう。作品集における重要な位置ということで考えられる可能性のひとつは“The Gray Champion” の物語が英国貴族主義に対

抗するアメリカ植民地民衆の自由を求める戦い、というストーリーがホーソンの生きた19世紀初頭のアメリカ国民意識の高揚を受けた国民文学の要請の声に応えようとしたということではなかったであろうか。

アメリカのロマンス作家が作品の素材の乏しさに味わった困難はヘンリー・ジェームズの『ホーソン論』によって、よく知られている。<sup>1)</sup>ジェームズの言うように、古城も蔦のはった廃墟も貴族もいないアメリカの風土を背景にロマンスを書こうとするのは容易なことではなかったであろう。しかしそのようなホーソンもひとたび自国の歴史に目を向けると、その時すでに200年以上にわたるアメリカ植民の歴史があり、それにまつわる伝説やインディアンや独立戦争など豊かなアメリカ独自の題材があり、それらを素材に創作するのは可能であった。<sup>2)</sup>彼はそれらを用いて新しい文学の可能性を開いたといえよう。「白髪の戦士」“The Gray Champion”のソースであるニュー・イングランドの歴史や伝説はホーソンが最も好んだ題材であったし、この作品はそれらを用いてアメリカ精神を具現化した小品といえよう。しかしホーソンの関心は単にアメリカの過去の歴史を回顧的に描くのではなく、そのことにより彼の同時代である19世紀的現在を炙り出そうとしたことにあったといえよう。そうだとすれば処女作品集、*Twice-Told Tales*の巻頭という大切な位置に“The Gray Champion”がおかれた意味には彼の生きた時代のアメリカの状況の理解と彼の思い描くアメリカの理想像があったのではないか。

George Dekkerは「白髪の戦士」という作品がホーソンの *Grandfather's Chair* や *A Wonder-Book for Girls and Boys* のような児童読み物のレベルであって、大人にとってはあまりにも単純すぎるストーリーだと評している。しかしその単純さの中に後のホーソン独自の手法の萌芽が認められる点も指摘している。<sup>3)</sup>植民地総督が英国王によって任命されるようになってから、総督や王党派と植民地の民衆との抗争は珍しくなかったが、ホーソンの物語においてサァ・エドモンド・アンドロスの率いる一行と植民地の人々がボストンのキング・ストリートで衝突をする。その夕暮の薄明りの中に一人の年老いた軍人とおぼしき人物が姿を現わす、あるいは現わしたように思われる、その老人の凜凜たる態度は総督に代わって「第一の統治者」(chief ruler there)としてそ

の場を支配し、アンドロス一行は退却せざるを得なくなる。騒ぎが治まって人々が気がついてみると彼の人物の姿がない。あの「白髪の戦士」は実在の人物だったのか、それとも超自然的な存在なのか、または寓意的な人物か。歴史上の実在の人物とするならば物語に用いられた史実として何が考えられるか。また文学修業中のホーソンはそれらの史実をどこから得て、それをフィクションに仕上げる文学手法を誰から学んだのか。一体「Gray Champion とは何者なのか」。答はおのおの読者に任せられるというホーソン特有の ambiguity<sup>4)</sup>に焦点を当てつつこの謎ときに挑んでみよう。さらにこの小論において、19世紀前半のアメリカにおけるナショナリズムの高揚が新しい国民文学を求める動きの中でホーソンがそれにどう応えようとしたか、という視点で「白髪の戦士」という作品の位置づけもあわせて試みたい。

「白髪の戦士」はアメリカの歴史的年代や過去の事実を素材とし、それに想像上の過去を加えて作り上げるヒストリカル・ロマンスである。この作品には作家修業中のホーソンが作品の題材を求めて愛読したとされる Thomas Hutchinson の *The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay* の記述に付合する二つの記事が見られる。<sup>5)</sup>物語の前半の史実は “Boston revolt against the government of Sir Edmond Andros ”, そして後半は “The Town of Hadley was alarmed by Indian in 1675” であって、これら別々の事件を作者はひとつの物語としてまとめあげたのである。チャールズ二世に続くジェームズ二世の専制政治により、それまで培ってきた自治と自由が危機にさらされそうになった時、植民地ピューリタンたちの救済者として、作者はアナクロニズムを越えて regicide の一人を登場させた。史実からいえば14年間の隔たりのある事件を同時に起こった出来事としてひとつに結合し、話の興味を増大したのである。

ホーソンの物語の Initial Situation としては史家の記述と同じく 1689 年 4 月のある日の夕方のボストンに起きた事件を描いている。その場の情景を作者は「ニュー・イングランドのおかれている状況と教訓を一幅の絵にあらわしたもの」(a picture of New England and its moral) と表現している。場面の片側に信仰深い植民地の人々が不安と怒りに満ちた表情をして群がり、その反対

側にはジェームズ王から派遣された圧政的統治者の一行が対決をするという構図である。植民地に王の監督強化をはかろうとして、ジェームズ王はまず旧勅許状の撤廃、王領植民地総督にサァ・エドモンド・アンドロスの派遣を強行した。アンドロス総督は「人民の合意なき課税」(taxes levied without concurrence of the people)を企て、「もろもろの市民の権利の侵害」(the rights of private citizens violated),「自由の剥奪」(take away our liberties),「信仰の自由が危機にさらされる」(endanger our religion),そしてそれらに対する不満の言論に「新聞報道の規制」(restrictions on the press)を加える、という政策により専制的統治を断行しようとしたのであった。ここでわれわれ読者は上に列挙した反民主主義的項目が合衆国憲法の権利の章典に係わる内容であることに気付くのではないか。これらの諸政策に対し、それまで事実上の自治を行ってきた植民地の人々は抑え難い憤懣を抱かずにおれなかった。植民地がそのような状況にある頃、一方の英本国においてはホイッグ、トーリーの招請状を受けたオレンジ公が英国の危機を救うための動きをしていた。ウィリアムの計画が噂として植民地に流れると人民の間に旧勅許状への執着とアンドロス総督への反抗の雰囲気が高まり、各地で人民蜂起が起こった。それらの不穏な動きを察知したアンドロスは威圧的に「力をみせびらかそう」として4月のある日の夕方、参議会員たちと傭兵を従え、ボストンのキング・ストリートを練り歩かせた。一行の顔ぶれは Randolph, Bullivant, Dudley それにキングズ・チャペルの司教などの面々で、いずれも植民地人の憎しみの的たる顔ぶれである。それに続いて軍隊が機械仕掛けの兵隊のように行進した。

対立する植民地側に結集した人々には三つのグループがあった。第1のグループは信仰厚いピューリタン移住者の二、三世代であるが60年以上も前の初期ピューリタンの精神や特徴を態度や服装に残していた。それらを表わす somber, sober, severity, gloomy などの色彩は敵の英軍の真赤な軍服とコントラストをなして読者の目に写る。ホーソーンはこれらピューリタンを描く時彼等の頭上にあって、はるかな天を指すとんがり帽子に象徴される高貴な精神を尊しとする。と同時に彼等が偏狭さ、非人間性を合わせ持っている面にも目を向ける。それゆえにキング・フィリップの戦争の参加者たち、群衆の中の老

兵たちの残虐行いに非難を込めて「あまりに信仰に熱心なるがゆえに、幾多の村々を焼き払い虐殺した」と批判をし、さらに彼等の行動を祈り支えた、というピューリタンたちに対する皮肉も忘れてはいない。「信仰深い人々は全国津々浦々までも祈りをもって、彼等を支えたのであった」とつけ加えている。第2のグループはピューリタン革命の時にクロムエル軍の兵士として議会のために戦った老兵たちで、「スチュワート家にもう一撃加えてやろうとひそかにほくそえんだ」。そして幾人かの牧師たちの姿も認められた。彼等はジョン・ロジャーズのように殉教をも覚悟していた。

アンドロスの魂胆が、旧勅許状のもとの総督であり、ジェームズ王に敵対する植民地側の指導者 Bradstreet を制して攪乱をもたらすつもりにあることを見抜いた群衆は「昔の勅許による総督のために断固として頑張ってください」(“Stand firm for the old charter, Governor!”) と叫ぶ。これに対しブラッドストリート自身は「何事も軽はずみに事をしてはなりません。大声で叫ぶのではなく、ニュー・イングランドの平安のために祈り、この問題については神のみこころのまま辛抱強く待ちなされ」と言って民衆を静めるのである。ブラッドストリートの態度は同じく建国の指導者 John Endicott<sup>6)</sup> とは対照的である。ボストンの騒擾の中で、アンドロス率いる王党派と対立する植民地の民衆を導くブラッドストリートの姿勢は、パロの軍隊に立ち向かうイスラエル人のために執り成しをするモーセを髣髴とさせる。

このような植民地の危機の中、群衆の一人から「おお、万軍の主、あなたの民のために戦士を遣わし給え」“Oh! Lord of Hosts,” …… “provide a Champion for thy people!” という叫び声があがった。するとその声に呼応するかのように民衆の中から突然一人の年老いた人物が姿を現わす。老人はその事件の半世紀も以前に流行した初期ピューリタンの衣服を身にまとっていた、と紹介されるところからウィンスロップ総督の同時代人であろうと想像される。腰にひと振の重い剣を帯びているが、老いの足の震えを支えるために一本の杖を手にしていた。胸に垂れた「真白い髭」(gray hair) のためにその姿がいっそう神々しく見える老人はアンドロス麾下の軍楽隊の打ち鳴らす太鼓の拍子に合わせ、行進してくる兵士たちに向かって進んでいく。アンドロスの行列との

距離が 20 ヤードほどの所までに近づいた時、老人は手にしていた杖を指揮棒のように突き出し「止まれ」「Stand!」と叫ぶのである。そのとたん太鼓が鳴り止み、アンドロスの行進もぴたりと止まった。この姿勢にはかつて戦場で大軍の指揮をとったことのある軍人を思わせる威厳があり、と同時にその声は神に祈りをささげるに相応しい聖者 (the leader and the saint) の両面を兼ね備えた人物として描かれている。

不思議なことに老人が何者なのか、その場に居合わせたアンドロス一党は勿論、植民地の者たちも誰一人知る者がいなかった、というのである。アンドロス一行のブリヴァントが老人を愚弄するかのようにその人物を評した次のことばには冗談に込められた真実があるのかもしれない。「彼はこの 30 年を眠りつづけていて、何ひとつ時勢が変わったことを心得ぬ議会議員だということがおわかりになりませぬかな。おそらく奴は老オリヴァの名の宣言により我々を抑えつけようと考えているのでしょうに」と。事件の 30 年前といえば 1659 年、英本国ではその一年後に王政復古があったことから、この人物がクロムエルの革命に何らかの関係があったことの暗示ともとれる。さらに彼が革命に関わったと思われるのは老人自身の次のことばによって裏付けされる。「わしは以前国王その人の行進を立ち止まらせたことがある」「I have staid march of a King himself, ere now,...」。そうだとすれば老人の言う国王とはチャールズ王を指すということにならないだろうか。国王チャールズが議会を無視し専横する暴走を阻止したことを暗示することになる。そして彼は王の暴走をくいとめた (stay) 革命議会側人物ということになる。

さらに老人がなぜこの場に姿を現わしたか、については、彼自身次のようにその理由を述べるのである。「わしがここに来たのは圧制に苦しむ民衆の叫びがひそかな所にいたわしの心を騒がしたからのことだ。民衆が神にこのことを懇願したゆえ、聖徒たちの昔の目的を果たすため神は再度わしをこの世に現わしめ給うたのじゃ」。この言葉は何を意味するものであろうか。「ひそかな所」「secret place」とは隠れ家のような所なのか。あるいは彼の言葉遣いが「久しく使わなかった言葉で、幾年も前に死んでしまった人々のほか誰とも話をしたことの無い調子」であった、というのを合わせて考えると、彼自身生きた人

間ではなく、その「ひそかな場所」も墓という可能性もあり得よう。

作者はこの人物の紹介を続け、「その名前はその当時にはあまりに偉大すぎるけれども、後世になると君主にとっては屈辱的な教訓、臣民にとっては高い模範として、光輝あるものとなった判決をくださった、あの厳正な法廷の記録のうちに見出されるであろう」。つまり老人の身分はかつて裁判官であったという。それでは王を裁く大事件とは何をさすのか。有罪となった王とは誰か。言うまでもなくそれは1649年1月の特設法廷において国王チャールズ一世を専制君主、叛逆者、国家に対する公敵として死刑を宣告した裁判官の一人ということになるであろう。それがチャールズ二世の王政復古を前に、彼等の復讐を恐れ植民地に逃れたいいわゆる regicide judges と呼ばれるクロムエル軍の Lieut. General Col. Whalley と Col. Mager Goffe の2人である<sup>7)</sup>。彼等は最初ケインブリッジに住んだのだが、その後ニュー・ヘイブンに移った。追手がスプリングフィールドやさらに西の町々に及んだもののその先に潜伏する2人はついに発見されることがなかったという。

ハッチンスンの歴史によれば彼等がハドレーにやってきたのは1664年の10月のことで、Edward Whalley と彼の息子 William Goffe , それに後から加わった John Dixwell の3名である。事件が起こったのはキング・フィリップ戦争の最中の1675年9月1日のことで、住民たちは全員教会に集まり断食をしていた。その時インディアンの叫び声を耳にした男たちは銃を手に敵に立ち向かおうと外に出たものの指揮をとる者もないままに混乱するばかりであった。すると突然村人の誰一人顔を知らぬ、威厳のある人物が姿を現わし村人の先頭に立って指揮をとり、インディアンを追い払ってしまった。敵の後を追った人々が戻ってみると、あの救済者の姿はどこにも見当らなかった、という。ハッチンスンによればその人物は、実は王を処刑したウィリアム・ゴフであって、インディアンが密かに丘を下って村に忍び寄るのを知って隠れ家から飛び出し、インディアンに襲われた住民を助けた後、姿を消したという。これが「ハドレー伝説」である<sup>8)</sup>。

危機にさらされたピューリタンの建国の父たちを救うため一人の老人が突然現われ、敵を追い払った後に皆が気が付いてみるとその人は掻き消すように姿

が見えなくなっていた、というこの伝説はホーソーンが用いてよく知られるようになったがホーソーン以外にも幾人かの作家が使っている。ホーソーンの「白髪の戦士」が『ニュー・イングランド・マガジン』に発表される6年前に、James Fenimore Cooper は *The Wept of Wish-Ton-Wish* を発表している。それは1676年のコネティカット、ウィシュトン・ウッシイの村の出来事で、Heathcote がキング・フィリップ戦争の最中インディアンの攻撃を受ける物語になっている。同じく James McHenry の小説 *The Spectre of the Forest* (1823) の題材もこの伝説によっている。さらに James Nelson Baker の *Superstition* (1824) の悲劇も同じ伝説に基づいていると言われている。<sup>9)</sup>

しかしホーソーンが「白髪の戦士」の小説を書くに当たって影響を受けたのはアメリカの先輩作家たちからではなかったと思われる。Neal Doubleday も指摘しているが、それはホーソーンが愛読した Sir Walter Scott であって、彼の *Peveril of the Peak* (1822) の第14章に Major Bridgenorth が Julian Peveril にボストンから30マイル以上離れた小さな村で目撃した体験を語り聞かせるというストーリーに酷似した場面があるからである。フィリップ戦争の最中のこと、安息日の朝に村人が皆教会に集まっているところをインディアンの襲撃を受ける。男たちは銃を手に表に飛び出してみると村は彼等に占領されていた。村人の中に指揮をとる者がいないまま、戦はインディアン側の優勢となる。混乱の中、村人たちが今まさに村を引き払おうとしたその時に、一人の人物が姿を現わす。その個所は

“... A tall man, of a reverend appearance, whom no one of us had ever seen before, suddenly was in the midst of us, as we hastily agitated the resolution of retreating. His garments were of the skin of the elk, and he wore sword and carried gun ; I never saw any thing more august than his features, overshadowed by locks of *grey hair*, which mingled with a long beard of the same colour.”<sup>10)</sup> (イタリックス・筆者)

そして彼の巧みな指揮によってインディアンは敗走した。村人たちは感謝の祈りをささげる。



“... for a brief space we remained with our faces bent to the earth—no man daring to lift his head. At length we looked up, but our deliverer was no longer amongst us ; nor was he ever seen in the land which he had rescued.”<sup>11)</sup>

Bridgenorth はこの人物を Richard Whalley, あのチャールズ・スチュワートの裁判の判決を下した regicide の一人であった, という。

スコットによるこの物語が “angel of Hadley” 伝説によることは間違いない。ホーソンは Waverley Novels をよく読んでいたので「白髪 of 戦士」を書いた時にスコットの “grey hair” という表現も借りたものと思われる。

興味深いのはホーソンの物語の中の Gray Champion が予言の能力 (prophetic knowledge) の持主として描かれている点である。それはまるでエレミヤが, まだ起きてないエルサレムの陥落の幻を見たように, この人物もアンドロスに向かい「英国の王座にはもはやカトリックの暴君など居ないのだ。(中略)……今夜をもってお前の権力は終わりをとげるのだ。明日は牢獄の中じゃ」。そして予言は現実となり「翌日の日没以前には総督と共に得意になって馬に乗っていた者は皆囚人であった。」と作者は短く結んでいる。ハッチンソンによれば, ボストンの反乱の起きたこの日 (1689 年 4 月 18 日, 木曜日) にはまだ名誉革命の知らせはボストンに届いていなかった, というのである。1688 年 11 月 5 日にオレンジ公ウィリアムが 1 万 2 千の兵を率いてイングランド南部ブリクサムに上陸した。ジェームズ二世がフランスに亡命した翌年になって議会はウィリアムとメリーに共同の王位を授けることにし, 2 月 13 日に即位布告, 2 人の政権が確保された。だが当時の通信事情のため, 89 年 4 月 18 日の事件当日までにボストン市民の間に流れた噂は, ウィリアムの英国上陸の宣言のみしか伝わって<sup>12)</sup>いなかった, という。

しかしボストンの反乱の場においてジェームズ王を代表するアンドロス総督は武力と権威を越えたこの不思議な老人と, 自由を死守しようとする民衆を前にして, 後退しか取るべき道はないと判断したのか, アンドロスは一行と兵たちを引上げさせた。退却する軍隊を追って人々が騒ぎの中に気付いてみると, 彼の老人の姿が当らない。「或る者」(Some reported that,...) はブラッドスト

リート老総督が自分よりもずっと年をとっているひとつの姿 (a form) を抱きしめているのを見た、と言った。また「或る者は」(Others soberly affirmed, that...) 老人が「人々の目から消え失せ夕映えのうちに溶け込んでいった」(faded from their eyes, melting slowly into the hues of twilight,)。そしてついには老人の立つところが「空虚な場所」(an empty space) になったとまじめに断言した、という。

上の描写には特別の注意を払いたい。それはホーソーンの後作品の中に多かれ少なかれ見られる曖昧性が、初期の小品である「白髪 of 戦士」にすでに感じられるからである。ホーソーン作品の特性である曖昧性の最もよい例は『緋文字』第24章に見られるディムズディル牧師の胸の印をめぐる諸説である。よく知られている場面であるから、その個所の引用は省くことにするが、ホーソーンは「これらのいずれの説を選ばれても結構」と結んでいる。作者は甲か乙か、最後まで曖昧のままで留め、その結論は読者それぞれに任せる、という手法をとる。読者によってははぐらかされたと思う者もあろう。しかし物事に表や裏や側面があり、認知の範囲に限りがあり、その描写に限界を知る者の姿勢にむしろ好ましさを感じる者がいるのも事実である。しかし何よりも、われわれ読者にとっては書いた者さえ思い浮かばない想像力をそこに働かすことが許される余地が残されるという点である

では「白髪 of 戦士」に見られる曖昧性をホーソーンは誰から学んだのであろうか。前述の *Peveril of the Peak* にはホーソーン「白髪 of 戦士」の結論に類似した描写が見られる。インディアンの攻撃から村人を救った直後、姿を消した人物についてスコットは次のように述べる。

*"The prevailing opinion was..., that the stranger was really a supernatural being ; others believed him an inspired champion, transported in the body from some distant climate, to show us the way to safety ; others, again, concluded that he was a recluse,...or other cogent reasons, had become a dweller in the wilderness, and shunned the face of man."*<sup>13)</sup> (イタリックス・筆者)

ホーソンはこの作品に Gray Champion を登場させることを上のスコットの小説からヒントを得ただけでなく、描写も借りたように思われる。スコットの影響を裏付けるものとして、ホーソンの読書を調べてみると、Marion Kesseling の *HAWTHORNE'S READING* の1833年の記録にはスコットの作品を5回借出したことが記されている。「白髪 of the Peak」が初めて *New England Magazine* に載ったのは翌年の12月号であったことからホーソンが *Peveril of the Peak* を参考にしたのは十分考えられる。

スコットは作品における stranger の扱いを、“a supernatural being” とする説と生きた人間であるが事情により身を隠した regicide であるという説の両方があると述べたうえで、Bridgenorth にはその後者の方であった、と言わせている。

“I dispute not that it may please Heaven, on high occasions, even to raise one from the dead in defence of his country, yet I doubt then, as I doubt not now, that I looked on the living form of one...<sup>14)</sup>”

それではホーソンの作品の Gray Champion は歴史上実在の人物なのか、それとも超自然的存在と考えるべきか。作者自身はどちらとも断定していない。ホーソンにとってはそのことよりも物語のあの場に Gray Champion を登場させることの方に興味があったのではないだろうか。なぜなら “Whenever the decendants of the Puritans are to show the spirit of their sires” とある。ここにいう「ピューリタンの子孫たちが先祖の精神を示した」のはボストンの反乱の80年後、キリグ・ストリートに再び姿を現わした時、といえば Boston Massacre を指すのであろう。それから5年後レキシントンのグリーンに姿を見せた時、というのは1775年4月19日の独立戦争の発端にて、ということになる。そしてもう一度、バンカーヒルの地名の言及は1775年6月17日の激戦を指すのに他ならない。ホーソンは Gray Champion が歴史に姿を現わす時はいつもこのように「国内の専制が我々を圧迫するとか、侵入者の足跡が我が国土を汚す時」であるという。

それならば Gray Champion は生きた人間ということにはならないのではないか。Gray Champion とは一体何者なのか。生きた人間でないとすれば、超自然的存在なのか。作者はストーリーの途中で読者を迷わせておいて、最後に次のように結ぶのである。

Gray Champion とは “...the type of New England's hereditary spirit” である、という。ホーソーンのいう「祖先伝来のニュー・イングランド魂の表象」とは何なのか。それこそアンドロス政権がニュー・イングランド植民地から奪おうとした「信仰の自由」、「言論出版の自由」、「市民としての権利を行使する自由」など、初期ピューリタンがそのために祖国を後にし、命がけで守ろうとした建国の精神、「自由」ということではなかろうか。ホーソーンの Gray Champion とは、具体的な歴史上の実在の人物、regicide の William Goffe のイメージを借りた Mr. Liberty または Attitude of New England people for liberty といえるだろう。いい換えれば Gray Champion とは歴史上実在の人物とニュー・イングランド精神の疑人化<sup>15)</sup>という二つの性質を合せ持った人物といえよう。

ホーソーンがピューリタンの第二、第三世代に批判的であったことは先に述べたが、一方では彼等が英国国教会の権威や因習に反対し、その中心にあった国王に抵抗した急進的な面は高く評価した。彼等がなぜアンドロスの非民主的政権と戦わねばならなかったか、それは「事物の性質と住民の性格から生じたのではない奇型政府」だからであり、そのような政府を人民は廃止させることができる。(it is the Right of the People to alter or to abolish it.) からだ。そしてアメリカの歴史において自由と尊厳の維持が危くなる時、人民を導くために先の「ニュー・イングランド魂の表象」が形をとって現われるのだ。

ではホーソーンは 19 世紀前半のその時期に、17 世紀の植民地ピューリタンが英国王に抵抗する自由の守護神 Gray Champion の物語をなぜ書いたのであろうか。しかもその作品を処女短編小説集の巻頭という重要な位置においたことにはどのような事情が考えられるであろうか。

そのためにはホーソーンの生きたアメリカ社会と文学の関連を考えなくてはなるまい。19 世紀前半のアメリカの持つひとつの面は対外的に 1812 年の戦争

がアメリカ人をヨーロッパ依存から経済的にも精神的にも独立させ、ヨーロッパの価値観を否定させたこと。そして国内的には急速な西部発展により新世界の未来が期待され、アメリカン・ナショナリズムが高まった時代といえよう。それに伴って新たな国づくりの方向が文学にも求められた。国民的自覚は政治や歴史や宗教の分野からも具体的にアメリカの国民文学への期待の声として表明された。

それらのひとつに 1833 年の Rufus Choate 演説がある。<sup>16)</sup> その演説が行われた時セーレムに住んでいたホーソンはそれを聞いたと思われる。なぜなら “The Importance of Illustrating New England History by a Series of Romances like the Waverley Novels” の演説の中でチョーテが 1687 年にマサチューセッツ州イプスウィッチで起こったアンドロス政権に対する民衆の反抗をあげて、それが植民地における自由の精神の適例であると述べていることから推測ができる。チョーテはそれこそ後世の人々に記憶され、教えられるべき事件であると述べている。<sup>17)</sup> 彼はそれに続けてアメリカ史の記録の重要性を強調し、国民文学のモデルとしてウォルター・スコットの名をあげている。

ホーソンはチョーテの文学理論の影響は受けたが、それをそのまま受け入れたわけではない。例えばチョーテがアメリカ史の中でも避けるべきテーマとしてあげている「キューカー教徒に対する迫害」がある。それにもかかわらずホーソンは “The Gentle Boy” という作品を書いている。しかし「白髪 of 戦士」は間違いなくチョーテの主張の趣旨を最もよく反映した作品である。自国で文学の素材を見つけるのに苦心したホーソンが、19 世紀初頭というアメリカのナショナリズムの要請に応えようとし、チョーテの影響を受け、スコットに小説手法を学びこの作品を書いたといえまいか。「白髪 of 戦士」という一見子供向けとしか思えない初期の習作の中に、以上述べたような多くの問題が含まれている。そしてそこに先輩作家たちの手法や理論を越えた歴史的洞察や文学的才能を感じさせる作品であるといえよう。

## 注

- 1) Henry James, *Hawthorne*, (New York ; St. Martin Press, 1967) . p. 55.
- 2) William Tudor, "An Address delivered to the Phi Beta Kappa Society, at their anniversary meeting at Cambridge," in *Hawthorne : Tales of His Native Land*, edited by Neal F. Doubleday, (Boston : D. C. Heath and Company, 1962). PP. 127—131. なお、ダブルデイのこの書物には注5), 8), 10), 12), 17) にあげた資料を見ることができて、本稿をまとめるのに多くの助けを得た。
- 3) George Dekker, *The American Historical Romance*, (Cambridge : Cambridge University Press, 1987). P. 134.
- 4) Yvor Winters の表現を借りれば "the formula of alternative possibilities" ともいえようか。Yvor Winters, "Maule's Curse, or Hawthorne and the Problem of Allegory", A Collection of Critical Essays, *HAWTHORNE*, by A. N. KAUL, (Englewood Cliffs : Prentice-Hall, 1966). p. 21.
- 5) Doubleday, *Hawthorne*, from "Thomas Hutchinson, *The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay*," pp. 144 —147.
- 6) Nathaniel Hawthorne, "Endicott and the Red Cross" CENTENARY EDITION, IX, *Twice-Told Tales*, Ohio State University. ホーソーンの引用は "The Gray Champion" もこのテキストによっている。
- 7) *THE DICTIONARY OF NATIONAL BIOGRAPHY*, VOL. VIII, (Oxford University Press). PP. 71—73.
- 8) Doubleday, from Thomas Hutchinson, *History of Massachusetts-Bay* pp. 144—145.
- 9) Micheal Davitt Bell, *HAWTHORNE AND THE HISTORICAL ROMANCE OF NEW ENGLAND*, (Princeton, Princeton University Press, 1971). pp. 24—28.
- 10) Sir Walter Scott, *PEVERIL OF THE PEAK*, (New York, John W. Lovell Company). P. 144.
- 11) Ibid., p. 145.
- 12) Doubleday, from "Hutchinson's *History of Massachusetts-Bay*", p. 146.
- 13) Sir Walter Scott, *PEVERIL OF THE PEAK*, p. 146.
- 14) Ibid., p. 146.
- 15) John E. Becker, *HOWTHORNE'S HISTORICAL ALLEGORY*, (Now York, Kennikat Press, 1971). P. 31.
- 16) Rufus Choate の演説とヒストリカル・ロマンスについては竹村和子氏「ロマンスの占有」, 『英語青年』, 1993 年 5 月号, (pp. 54 —58) の論文がある。
- 17) Rufes Choate, from "The Importance of Illustrating New-England History

by a Series of Romances like the Waverley Novels Delivered at Salem, 1833." in *Hawthorne : Tales of His Native Land*, by Doubleday, pp. 132—134.